



つくば道

江戸城の鬼門(北東)にあたる筑波山を、徳川家康は「鬼門の守り」として崇め、中腹にあった中禅寺(現在の筑波山神社)を祈願所に定めた。寛永三年(一六二六年)、三代将軍家光の時、堂社を一新する工事が始まり、北条から神郡を抜けて筑波に至る資材運搬路が作られた。これが後に「つくば道」と呼ばれ、参詣道となった。

白井と神郡をつなぐ県道 ①

現在の道は、大正頃に作られた。かつての道は、信号から約二〇m東に橋がかかり、②の板碑の辺りに抜けていた。かつて橋があった場所には、白井側に文禄二年(一五九三年)の日待碑が、神郡側には二十三夜石橋供養塔が立つ。

馬頭観世音の板碑 ②
文政六年(一八二四年)建立。馬頭観世音は、馬の守護仏、家畜類を救う観音ともされる。馬頭尊とも呼ばれ、江戸時代から農耕馬の霊を供養するために碑が立てられるようになった。

奈良時代の条里制の水田跡や古墳が多くあったが、戦後の水田の基盤整備により、古墳は数基残すだけとなった。金堀塚は、前方後円墳で石室も見える。そばの堤防状の土盛りは十三塚とよばれ、溜め池の土手とも、古道の一部とも伝わる。

白井児童館 ④
石田寺の跡地の一角。多くの石碑や石仏が見られる。文禄五年(一五九六年)の日待碑は貴重。

六丁目の石鳥居 ⑤
「六本松の鳥居」とも呼ばれる。鳥居より上は、石段の道が続いていたが、昭和四十年代に道路に舗装される。近くには千手沢からの用水が流れ、松尾芭蕉の弟子であった服部嵐雪の句碑「雪は申さず先ず紫の筑波山」や、

物。入口や鬼瓦に「下」印がある。平成二十二年に改装が行われ、イベント時に公開、裏手にはバイオトイレも設置された。

対宝館(たいほうかん) ⑪
江戸時代から残る旅館。つくば市小田の「宝蔵山」と相対する「が」名前の由来。幕末の水戸天狗党の幹部らが宿泊したと伝えられる。

鍵家の前の井戸。筑波六井の一つ。清水(しみず) ⑬
大樹の根元から水が湧きだし、列名、雲の井とも言う。筑波六井の一つ。横の坂を登ったところに清水稲荷がある。

旧筑波第二小学校 ⑭
現在、通信制高校の校舎として使われている。江戸時代には、時宗来迎寺があった。

福来(ふくれ)みかん
みかん栽培北限といわれる筑波山の在来種。実は小さく、皮を乾燥させ粉にして七味唐辛子に混ぜて使われている。

筑波山神社

平安初期に、法相宗の僧、徳一によって開かれた寺が、後に中禅寺となる。中禅寺は、戦国末期に焼失したが、家康に仕えた光善上人が復興に力を注いだ。その後、家光による再興を機に、門前町が形成され、参拝客で賑わった。明治に入り、廃仏毀釈によって、寺院や仏像が壊され、残った建造物も仏教色が払拭された。明治八年(一八七五年)、中禅寺大御堂の跡地に、筑波山を御神体とする筑波山神社の拝殿が完成し、昭和三年(一九二八年)の改修を経て、現在に至る。拝殿に向って右手にあるマルバクスは、葉が丸いクスノキの変種で珍しく、市指定天然記念物。

中禅寺本坊知足院跡 ⑮
今は石垣のみが残る。石段を登ると、水戸天狗党の総裁であった藤田小四郎の像がある。奥には、明治四十二年(一九〇九年)の建築で、筑波山に高層気象観測所を設置した皇族の山階宮のために造られた館が、現在は「つくば科学万博記念館」として整備されている。

筑波山大御堂(おみどう) ⑯
昭和三十五年(一九六〇年)に復興。かつて、中禅寺に祀られていた千手観音を安置している。坂東三十三観音霊場二十五番札所。近くにスタジイの大樹がある。

御神橋(ごしんきょう) ⑰
寛永十年(一六三三年)の造立。春(四月一日)と秋(十一月一日)の御座替祭の時に、参拝客の通行が許される。県指定文化財。

ひがしやま
東山
風返峠を経てかつて国府があった石岡にぬける府中道沿いには、本通りと同じく、旅籠が並んでいた。

つくば道

筑波山名物 ガマの油 光善上人が従軍した大阪夏の陣・冬の陣で傷ついた人を「ガマの油」で治したという話がある。

御座替祭(おざかりさい) 筑波山神社の春と秋の神事として有名。筑波山の男女の神が和合して宿した生命を里に迎える神事から始まったとされる。